

あ い さ つ

佐賀大学教育学部附属養護学校校長 溝 上 脩

ちえ遅れの子どもの教育にとって、何が最善の方法であるかを断定することは極めて難しいことでもあります。と申しますのも、これらの子どもたちの能力は様々で、一人ひとりそれぞれ違うので、A児にとって最善の方法であっても、必ずしもB児にとって良いとは限らないからであります。しかも、ちえ遅れに加えて、情緒障害、言語障害、運動障害などが重複してきますと、その指導は更に複雑になってまいります。その意味では、この教育は、一人ひとりの子どもの可能性に対する開拓であり、実践であると思います。

さて、附属養護学校が開設されてから早や8年目を迎えましたが、この度第四回の研究協議会を開催することになりました。その間の研究経過を振り返ってみますと、昭和53年度から55年度迄は、「児童・生徒の実態に応じた教育課程の編成と実践」という研究課題で、もっぱら教育内容をどのように編成したらよいかに研究の中心が置かれていました。次の昭和56年度から58年度にかけては、引き続き同じ研究課題ではありましたが、年次計画として、「領域、教科を合わせた指導」、「教科（国語、算数・数学）、養護・訓練の指導」、「特別活動、道徳の指導」の三つに分け、具体的な教育実践と関連させながら教育課程の構造化を図りました。そして、昭和59年度以降は、これらの教育課程を土台として、どのように実践を進めたらよいかという指導法の問題に取り組んでおります。

ところが、現在の教育実践を進めていくに当たり、また新たな問題が生じてきました。現在の本校における児童生徒の実態が開設当時のそれとは量的にも、質的にも変化してきたことでもあります。当初は、比較的軽度の児童生徒が多く、しかも在学者数も全部で39名でありましたが、現在では、在学者数が53名（昭和61年度は56名の予定）に増え、更に障害の程度が重度化し、障害の種類もますます多様化してまいりました。従って、その指導内容や方法にも、若干の修正が必要になってきたことでもあります。そこで私共は、今回の研究協議会で、児童生徒の特性に適合した教育実践は如何にあるべきかという研究課題を設定し、中でも、その指導形態や指導の場について教育実践してきたことを発表することにしました。そして小学部では、教育効果を高めるために、集団学習と個別学習を機能的に関連つけた指導形態を工夫し、実践してきたことを発表することしました。また中学部では、生徒の重度化、多様化に応じて、ひとりで生きていくための生活単元学習の在り方について提案することになりました。高等部では、将来社会適応がうまく出来るように、体力づくりと基本的生活習慣の形成を目指す日常生活の指導を取り上げました。これらの研究課題は、各学部の教育実践の必要性から要請されたものであり、理論的には、まだ不十分な点が多々あると思いますが、足らざる点は今後一層深めていきたいと考えております。どうか同じ悩みを持つ諸先生方からの忌憚のないご意見を頂ければこの上ない幸と存じます。

今回の研究協議会の開催に当たり、ご指導頂きました教育学部長をはじめ、大学の先生方、ならびに司会者、助言者の先生方にたいしまして厚く御礼申し上げます。おわりになりましたが、ご多忙中にも拘らず、遠路はるばる私共のためにご講演下さいました、光の村養護学校長の西谷英雄先生に心から感謝申し上げます。

研究の概要

1. 第Ⅲ期研究主題 「児童・生徒の特性に適合した教育実践の姿」とはどのようなものか。
——指導法、指導の場およびその実践構造——

2. 第Ⅲ期研究主題の設定について

本校は、53年4月に開校された。それ以来、六年間「本校の児童・生徒の実態に応じた教育課程の編成と実践」という主題のもとに、次のような基本方針を立てて教育課程の構造化を行ってきた。

- 実践をしていく上でなされる討議を学級担当、教科担当の小単位から学部単位、学校単位へと広げることによって、それぞれの実践により方向性と力動性をもたせたい。
- そのためには、その討議をするための全校的に共有された資料づくりが、まず必要であろう。
- その資料づくりは、教育課程編成の手続きに沿って具体的な実践を反省・整理することから進めよう。

58年度までに、一応の整理を終えた。

その成果のひとつは、教育目標の図式化とともに、小・中・高各学部での取り組みの基本線がある程度詳細な形で構造化され、それが構造図として、共有される資料、となったことであり、反省は、一般論的な資料整理にならざるを得なかったり抽象的になったりして、本校における教育課程の基本的立場、と児童・生徒の特性、や教育内容の組織様式と指導形態、に関する基本的、具体的なおさえがあまりなくなったりしていることである。

構造化を進める観点は「教育課程編成の手続き」によってきたが、具体性を欠くという大きな反省点が出てきたその背景には、実践資料の不足と整理されてきた実践資料をどこにどう位置付けていくかという基本的なおさえのあまさが第一にあげられる。あらゆる活動・営みは、すぐれた構造からすぐれた効果を生ずるもの、という構造化の意義を再確認して、実践資料の蓄積に基づく教育課程の構造化に取り組む必要が、再度出てきている。

59年度からを第Ⅲ期と位置づけ「いったい、この子どもに何をどのようにして教えていったらよいか」という基本的なところでとまどわずにすむ方法を、児童・生徒の特性、実践の姿、を柱とした構造化を進めながら、あらたな研究主題によって追究していってみたい。

3. 第Ⅲ期研究方針・日程・組織

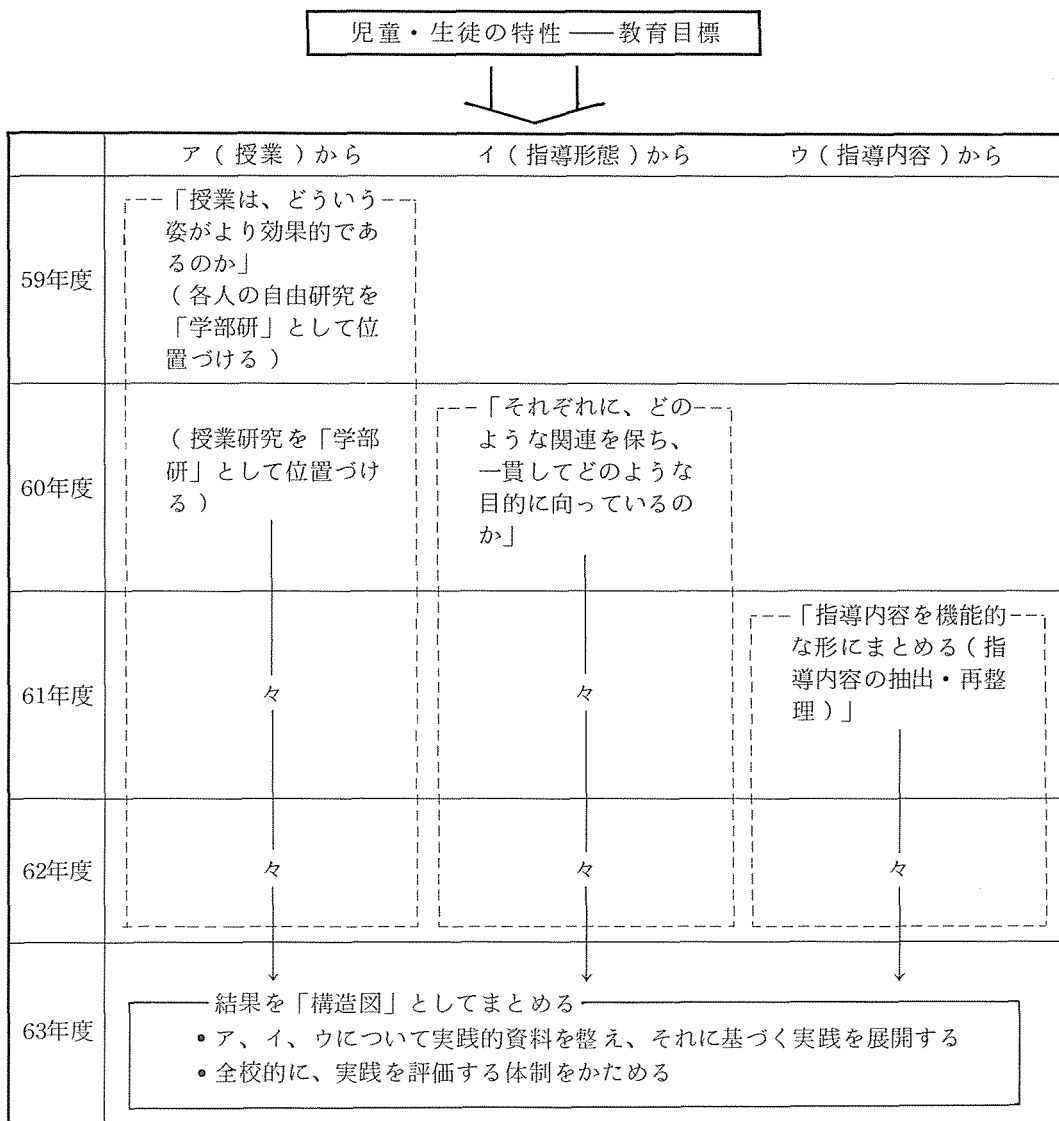
日々の具体的な教育活動を通して資料を収集し、第Ⅱ期までに出てきた成果と反省点に立ってより構造化を進める。その観点は次のようである。

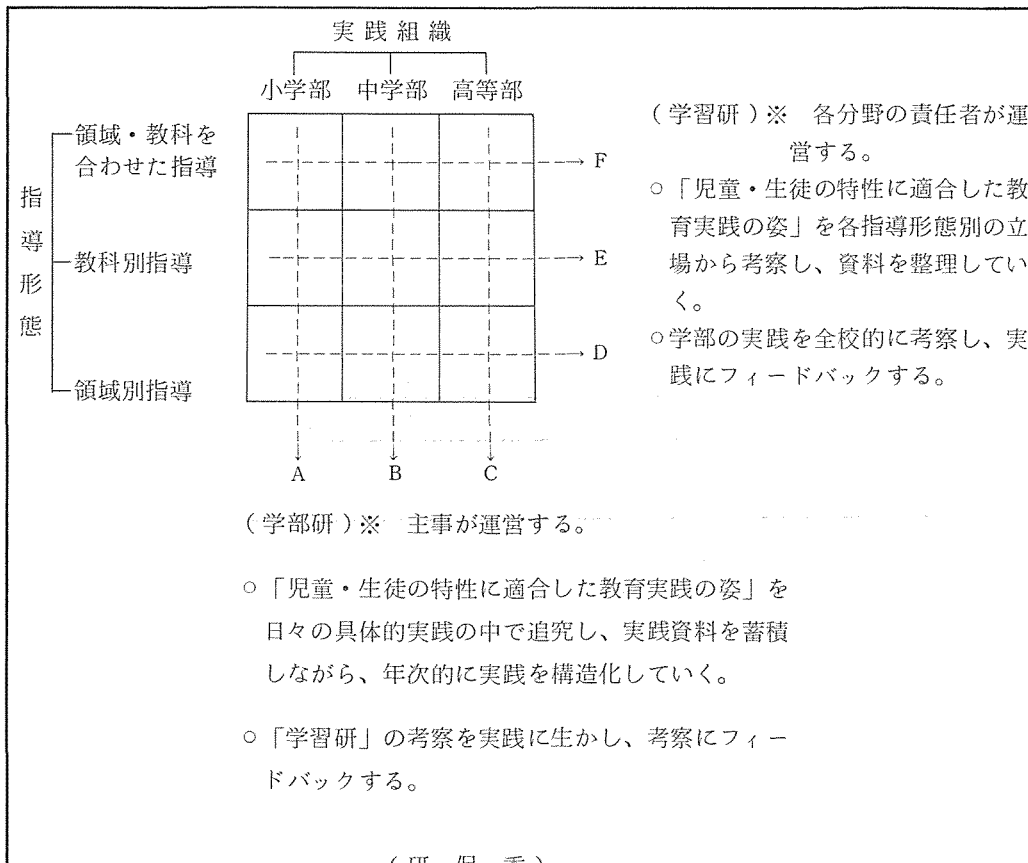
1. 第Ⅱ期までに、小・中・高各学部の教育課程の構造図を整理したことは、各学部の実践がより統一性をもって作用する、という将来的展望に立ってのひとつのステップをふまえたことであり、その構造図を今後の実践的研究の成果をおろしていく骨格として位置づけながら、実践資料に基づいて修正を加えていく。

2. 次の三点を実践資料を収集する視点とし、授業研究によって具体化していく。

- 児童・生徒の特性について
(生活実態、進路状況等から、)
- それに対応する教育内容の組織様式と指導形態に関する教育課程の二重構造性について
(指導内容を実践的に再整理し、学習活動を子どもの生活実態に合わせることを考え、)
- 実践的要因について
(週時程表・一単位時間などの時間的要因、教材・教具・場所などの物的空間的要因、グループワーク、チームティーチングなどの人的要因を再考する。)

— 第Ⅲ期年次計画(案) —





(研 促 委)

- 常時継続されていく研究と研究発表会に向けての研究を企画する。

4. 研究の経過

第Ⅰ期(53年度～55年度)

学部主体の研究組織によって実践資料を蓄積していくとともに、構造化への足がかりをつくる。

(研究紀要第1集、第2集)

— 研究主題 —

「本校の児童・生徒の実態に応じた教育課程の編成と実践」
 — 社会生活適応能力の向上・育成をめざす教育 —

第Ⅱ期(56年度～58年度)

学部研究と学習指導研究を組み合わせた研究組織による教育課程全体に関する取り組みによって、実践資料の蓄積とともに教育課題の構造化を進める。(「指導内容要素表(試案)」、研究紀要第3集、58学部研資料、58学習研資料)

— 研究主題 —

「本校の児童・生徒の実態に応じた教育課程の編成と実践」

56年 — 領域・教科を合わせた指導 —

57年 — 教科（国語、算数・数学）、養護・訓練 —

58年 — 領域別指導（道徳、特別活動）および教育課程の構造化 —

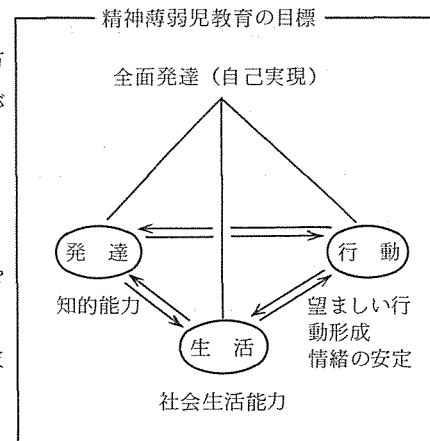
— 第Ⅱ期までの結果（資料1） —

○ 実態のはあくについて

「重度化」、「多様化」、「能力差」が共通的なことばとして用いられている。しかし、これらのことばがどのような状態をさしているのかが具体的でない。指導が偏ってしまうことや可能性の芽を摘み取ってしまうことを避けるためにも、これらのことばがもつ具体性を追究していく必要がある。

○ 目的の設定について

59研で右図が共通理解された。本校の教育目標、方針などを別の視点から見直すための資料として意味がある。



○ 内容の選択について

- ・「日常生活の指導」「生活単元学習」「作業学習」「遊び」の四分野で「56指導内容要素表（試案）」をまとめる。（56年度研）
- ・国語および算数・数学科の「指導内容段階表」をまとめる。（57、58年度研）
- ・体育科のユニット（体操、ボール運動、器械運動）、道徳の「指導内容一覧表」をまとめる。（58年度研）

・国語、算数・数学、音楽、図工、美術、体育科では、それぞれに年間カリキュラム、または発達に即したカリキュラムをまとめる。指導内容に時間的意味づけをしたものとして、この資料から指導内容の取り扱い方および内容のポイントをみることができる。

また、部分的には未整理のところも残してはいるが、これらによって、現在本校の実践で扱われている内容が、ほぼ出そろったことになる。今後、実践を計画・分析していく上で、指導内容の偏り、子どもがもつ可能性、12年間の積み上げなどを判断していくための大きな手がかりを得たと考える。

なお、養護・訓練については、その特殊性のために、詳細な内容を整える是非についての判断を今後の実践にまかせたい。

○ 内容の組織について

軸となる指導形態（領域・教科を合わせた指導）、発展的・補足的なもの（教科別指導、特別活動、養護・訓練）の考え方が明確に出されている。ことばの違いはあるが、各学部とも共通な考え方として受けとめることができる。このことは、実践上の問題を解決していくひとつ

の糸口になる。たとえば、小・中・高の一貫性をとらえていく時、軸となる「領域・教科を合わせた指導」の関連からみていくことができる。

なお、反省にも出されているが、軸となるものと発展的・補足的なものとの関連をどのようにもたせていくかという課題が残されている。

○ 内容の提供について

「提供」とは、言い換えれば具体化であり実践そのものである。課題、時間的・空間的・物的・人的なセッティング条件、強化のしかたなど「学部研」による資料が充実してきている。

「実態のはあく」から「内容の提供」までに關しての資料がほぼ出そろい、小・中・高各学部で教育課程の構造化が進められた結果、「教育課程の構造図」としての資料がまとめられた。こうした多くの資料は、今後の実践と研究を計画し方向づけていくための「共通の資料、であることを再確認するとともに、これを糧に、実践と研究をより構造化・機能化させていきたい。

第Ⅲ期（途中経過—59・60年度）

— 研究主題 —

「児童・生徒の特性に適合した教育実践の姿」とはどのようなものか
— 指導法、指導の場およびその実践構造 —

— 59年度 —

63年度の構造化に向けて、59年度段階では「58年度に構造化された教育課程が具体的な実践のもとで、どのような問題点をかかえているか」を探るために個人研究的レベルで取り組んだ。結果をもとに「学部研」で討議し、構造図に修正を加えながら60年度の研究につなげる。

○ 59研「研究テーマ一覧」

（小学部） 課題別指導からの提言

むとう：日常生活習慣の向上について

— TH児の衣服の着脱・くつの着脱を通して —

みねまつ：基本的な生活習慣を確かなものにする指導方法

さわだ：基本的な生活習慣の確立

— Yちゃんのトイレ指導 —

ふかまち：指導課題に差のある児童4名の小集団指導について

— 小学部Aグループの指導を通して —

かじた：運動機能を中心としたYちゃんの指導

— 家庭との連携をめざして —

もりなが：人や物とのかかわりを高める指導の試み

— YN児の指導を通して —

いけだ：学力がついていけず、普通校から転校してきた子どもの指導

— S J児の全面的な発達をねらって —

ふちがみ：特定のパターンに固執しがちな子どもの指導

— Sくんの場合 —

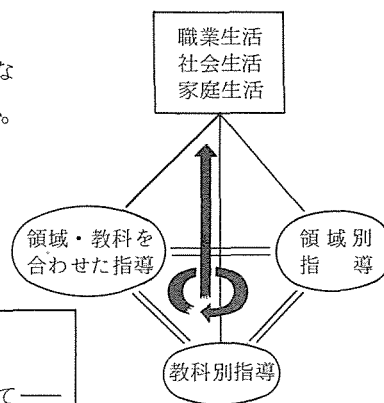
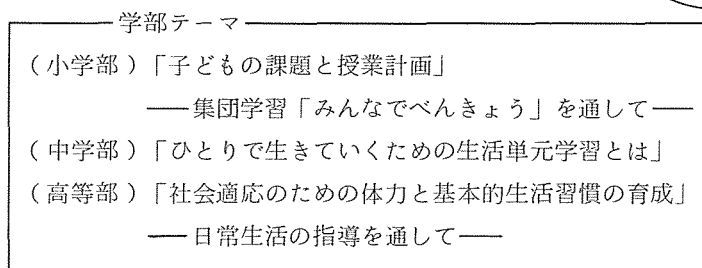
- (中学部) 生徒の実態に応じた指導法の研究
 す どう : 身体諸機能の向上をめざして
 — 木工作業学習 (花台の製作) の指導を通して —
 なかしま : 作業の技能と態度の向上をめざして (調理)
 ま き : 作業学習 (園芸) における言語・数量の指導
 うつみや : 言語に問題をもつ生徒の歌唱指導
 は ら : 生き活きとした表現の喜びを味わわせる指導法の追求
 — フィンガペインティングを通して —
 そえじま : 中学部における英語の指導の可能性をさぐって
 — 能力別 A グループを通して —
 う ち だ : 自閉的な子どものかかわり方について
 — 年長自閉児に対する水泳指導の取り組み —
 いさかり : E 子の訪問教育と親指導について
 — 病院・学校・家庭の連携のもとで —
- (高等部) 社会自立の基本的適応能力を育てるために
 — 日常生活の指導を通して —
 「朝の運動、朝の会・帰りの会、給食、日課帳、掃除、衣服の着脱」
- (保健室) 本校児童・生徒のプロフィール (保健面)

— 60年度 —

60年度段階では、児童・生徒の特性を探るとともに次のような方針で取り組んでいる。

1. 授業はどのような姿がより効果的であるのか。
2. 現在実施している指導形態は、それぞれにどのような関連を保ち、一貫してどのような目的に向っているのか。

言い換えれば「この図 (右図) を、いかに実践の姿として具体化していくか」という研究課題のもとに、授業研究に腰を据えながら「学部研」としての整理を進めている。



以下、第Ⅲ期計画の途中経過ではあるが、59・60年度分のまとめを「各学部の研究と実践」という形で報告していきたい。

なお、それぞれの報告のまとめを受けて次年度からの企画を具体化したい。

(研究促進委員会)

— 第Ⅱ期までにまとめた資料 — (資料1)

		小学部	中学部	高等部	
領域・教科を 合わせた指導	日生単作業遊び				56指導内容要素表(試案) • 基本的な考え方 (日生、生単、作業、遊び) • 指導内容 () 58生単における道徳指導の実践分析 • 道徳の指導内容項目一覧表 • 項目と「指導内容要素表(試案)」の関連表 • 関連表と単元との関連 • 実践分析
	国語	<p style="text-align: center;">全面発達(自己実現)</p> <p style="text-align: center;">知的能力</p> <p style="text-align: center;">生活</p> <p style="text-align: center;">社会生活能力</p> <p style="text-align: right;">望ましい行動形成 情緒の安定</p>			57指導内容段階表(書く) 年間カリキュラム(書く) 58指導内容段階表(聞く、話す) 年間カリキュラム (聞く、話す、読む、書く) 各単元における内容分析 ※ 実態分析
算数	57指導内容段階表(数と計算) 年間カリキュラム(数と計算) 58指導内容段階表(量と測定) 年間カリキュラム(量と測定) ※ 実態分析、授業研究				
音楽	58年間カリキュラム(58、59) ※ 実態分析				
図工美術	58版画からの問題提起 • 年間指導計画表 ※ 実態分析、授業研究				
体育	58発達に関する基本的な考え 検査用紙 発達に即したカリキュラム ユニット (体操、ボール運動、器械運動) 個人別体位一覧表				
領域別指導	特活				58特活の実践調査
	養・訓	57養・訓に関する指導についての事例研究 ふり分け表 58養・訓部の組織および運営についての提案 • 全国附養へのアンケート • 実態調査—リストアップ • 諸検査 • 抽出指導の事例研究			
		教育課程の構造化 ○ 学級制の導入 • 学級指導 • 課題別指導 • 集団指導 ※ 構造図	教育課程の構造化 ○ 指導形態として軸となるもの、発展的・補足的なもの の明確化 • 領域・教科を合わせた指導 • 教科別指導(6教科) • 領域別指導 ※ 構造図	教育課程の構造化 ○ 「総合」の設置 • 作業学習 • 総合 • 教科別指導(5教科) • 特別活動 ※ 構造図	